

梅花流詠讚歌でつづる大本山總持寺開山太祖瑩山紹瑾禪師の御生涯

常
濟
の
光

瑩山(けいざん)禅師は鎌倉時代に越前の国にお生まれになりました(誕生の年は一一六四年とも一一六八年とも言われています)。禅師の母上はまだ結婚前のある時、不思議な因縁から京都・清水寺の十一面観音を感得し、一生涯の念持仏として観世音菩薩の小像を肌身離さず持つていました。やがて結婚し、この観音像に祈願して懐妊した時、「お授けいただいたこの子が、もし成長して世のため人のためになるようでしたらごうご無事に産ませてください」とお願いしました。そうしてこの世に生を受けたのが瑩山禅師でした。

太祖常済大師瑩山禅師誕生御和讃

この世の人を救うべき、良き子をわれに授けよと

真心まごころこめて母ぎみは、観音菩薩にいのらるる

ねがえないで生まれしは、世にもめでたき御子みこにして

救世ぐぜの御姿おのずから、そなわりたもうぞありがたき

禅師は幼名を行生(ぎよしょう)といいました。信心深い母上の慈愛にみちた養育を受け、八歳の年に越前の永平寺に登り、義介(ぎかい)禅師について仏の道に入りました。やがて僧名を紹瑾(じょうきん)といただきました。

太祖常済大師瑩山禅師修行御和讃

みほとけをおろがみまつりうるわしき、春もやよいの越こしの山

道を求めて八つの齡、名を紹瑾じょうきんとあらためぬ

若き瑩山禅師は諸国での修行の後、能登国酒井保(さかいほ・石川県羽咋市)に新たな禅の道場を開き、河谷山永光寺(ごうくさんようこうじ)と名づけました。禅師の著『洞谷記(ごうくき)』は、ご自分の出自や永光寺草創に関わる貴重な資料です。その中に二つの和歌があります。いずれも禅師が夢中に感得したことを詠んだものです。一首の意は「八幡の神様がその姿をあらわし、今年から永光寺の建つ、この山の守り神となりましよう」と言われたことだ。もう一首は「私がこの寺にいると聞いて、諸方から多くの人びとが苔むす険しい山を越えて訪ねて来てくれた」。いずれも瑩山禅師門流の発展を予言するような夢でした。

ことしより八幡の神のあらわれて やわた 我がたつ木の守となるかな
われ棲むと那坂の山も踏みならし なさか 苔のしたきて人ぞ訪い来る こけ

永光寺に続いて瑩山禪師は、能登国鳳至郡（ふげし）ごおり・石川県輪島市の真言律院を曹洞宗に改め、諸嶽山總持寺（しよがくさんそうじじ）を開きました。明峰（めいほう）・峨山（がさん）という二人のすぐれた弟子を筆頭に、禪師の門流は永光寺と總持寺を両拠点として曹洞宗の教えを盛んに広めました。やがて一三三五年、六十二歳（一説に五十八歳）を二期としてこの世を去ることとなりました。最期をさとした禪師が弟子たちに語った言葉は、「念起ればこれ病い、続かざるはこれ薬。一切の善悪、すべて思量することなかれ。わずかに思量にわたれば、白雲万里」というものでした。

太祖常濟大師瑩山禪師入寂御和讃

能登のみ山の秋なけば あまたの弟子に見守られ

最後の教えねもごころに 説かれたまいし尊さよ

禪師自身の述懐によると、若い頃はいら立ちの心が起きやすい性質だったそうです。しかしある出来事をきっかけに、禪師はそのことを深く回心し、「これからは「慈悲の聖者」に生まれかわると決意されました。母上の念願もそこに重なり、自分は終生、衆生救済の誓願に生きようと心に決め、それを貫かれたのです。

太祖常濟大師瑩山禪師讚仰御詠歌

常永久に人を濟して今もなお とことわ 禪師の慈悲は世を照らすなり わた

總持寺二代となった峨山禪師は、御開山瑩山禪師とともに後の曹洞宗教団を支える礎石となりました。お一人のお姿はあたたかも太陽と月の光ように、今なお諸嶽山總持寺の天空に輝いています。

大本山總持寺二祖峨山禪師御詠歌

あな尊 とうと 瑩峨二尊の月と日は けいが にせん 諸嶽の山に今も輝く しよかく

「瑩山禪師の音」「總持寺の音」

「常済(じょうさい)の光」は梅花流詠讃歌を中心に構成していますが、そのほかにいくつかの音を取り入れています。それは「瑩山禪師の音」「總持寺の音」とも言うべきものです。

一つには「法螺貝(ほらがい)の響き」です。瑩山禪師は自著『洞谷記(とうこくき)』の中で、ご自分は前生において、お釈迦様の生まれるはるか以前の毘婆尸仏(びばしぶつ)の時代、須弥山(しゅみせん)の北にある雪山(せっせん)に棲む異形の神であり、ゆえにこの世では北の国に縁ありて生を受けた。よって今では白山の氏子なのである、という不思議な因縁を述べています。白山は道元禪師も信仰した山岳修験の霊場です。能登にもその影響は大きく、永光寺(ようこうじ)近くには石動山という修験の山もありました。修験者の吹く法螺貝の音は、瑩山禪師の生きた北陸・能登の山の響きだったのです。

二つには「大般若の声」です。とどろくような太鼓の音、大喝するような読経の声、勢いよく繰り広げる大般若の経巻。現在、各地のお寺で行われている大般若会(だいはんにゃえ)は数ある法要の中でもとりわけ異彩を放つものです。曹洞宗で最も早い大般若会の記録は瑩山禪師が永光寺(ようこうじ)における寺院行持の子細をまとめた『瑩山清規(けいざんしんぎ)』です。法堂を揺るがすような大般若の大音声は、七百年前の瑩山禪師の時代に遡ることが出来るのかも知れません。

三つには「大悲真読(だいひしんどく)」です。『大悲心陀羅尼(だいひしんだらに)』は、曹洞宗僧侶の誰もが読む經典ですが、總持寺ではこれをよそにはない独特の読み方をします。経文の一字一音をきわめてゆっくり、独特の節回しで読むのです。それは瑩山禪師亡き後、永光寺と總持寺、二つのお寺の後席を嗣いだ峨山(がさん)禪師が、両寺の朝課を兼行するために、片方の朝課を終えるや50kmの山道を疾走しもうひとつのお寺に至るまでの間、その到着を待って読経を長く引き延ばして読んだ、という言い伝えによるものです。その道筋は「峨山道」と呼ばれて今に伝えられています。峨山禪師は瑩山禪師の教えを受けるとともに、多くの弟子たちと全国へ広がる曹洞宗教団のいしずえを築かれた人でした。「大悲真読」は瑩山禪師と、その教えをひとすじに守り続けた峨山禪師を讃える声なのです。

企画／佐藤俊晃・曹洞宗秋田県宗務所
出演協力／秋田県梅花流師範・詠範の会